

また妊娠中のトラブルの有無と児の先天異常との間には関連がみられない。

5 脳神経系の先天異常と母の条件との関連

一疾患別にみた発生要因調査一

小林英郎

先天異常の発生頻度は、種々の理由から、その調査した場所、年代及び方法等によって、かなりのばらつきのあるものが多く、まして、その発生要因については、限られた局面ではわかっているものはあるが、広い範囲の調査による報告はあまりみられない。

今回は、当調査のうち、A表からD表まで、つまり妊娠前から分娩時までの、薬剤使用状況を除くすべてのデータについて、脳、神経系の奇形発生要因を求めべく、分析してみた。

(1) 分析対象及び分析方法

奇形群は、無脳児9件、二分脊椎4件、水頭症11件、小頭症3件、巨頭症及び頭蓋閉鎖症各1件、計29件である。また対照群としては、先天異常児、流産、死産及び多胎を除いたいわゆる単胎、健康児1,512件を用い、調査項目により、情報のある例だけを対照群として使用した。

調査方法としては、項目により、頻度や平均値等を、対照群と各疾患群との間で比較した。しかし、奇形群の中には、あまりに少数例のものも含まれるので、脳神経系の奇形の全て、29例についても、対照群と比較してみた。その内容は、①主として遺伝的環境について15表、②妊娠以前の種々の母体環境について8表、③胎生期の母の生活環境について13表、④住所地の環境3表、⑤妊娠経過及びレントゲン撮影等について11表、⑥胎児側の情報として2表、合計52表によってなされた。これらの項目は、既に単純集計で報告した主な項目は、すべて含まれている。

(2) 結果

紙面の制限もあるので52表の全分析を述べることはできないので、多少なりとも意味のありそうな例をまとめてみることにする。

ア 発生頻度

2胎及び3胎を含む、新生児の全数1,4920件を母数とすると、無脳児9件は、出生1000件あたり0.6となり、従来報告の0.2～3.7の中に入る。また水頭症11件は、出生1,000件あたり0.7で、この頻度は1,961年から1,964年の間に調査されたWHOの報告の0.5～0.9のちょうど間にあり、標準的なものである。二分脊椎や小頭症の場合は、臨床的な定義が難しいためか、標準の値を探し出せなかった。本調査の出生1,000件あたりの値は、前者は0.3後者は0.2である。

イ 対照群と多少差の認められた情報

a) 妊娠中の母の体重増加

体重増加は奇形群でわずかに少く、この傾向は、羊水過多症を起こしやすい水頭症群を除く

と、更に顕著である。

b) 血 圧

最高血圧、最低血圧ともに、奇形群に於いて、妊娠中期以後に高く、この傾向は、無脳児及び水頭症に於いて顕著であった。

c) 浮 腫

奇形群の方に、浮腫の発現率は低かった。この傾向は体重増加の少かったことと符合する。

d) 妊娠中の腹痛または性器出血

妊娠全期間中、一度でも腹痛または性器出血の経験のあるものは、対照群では3,379件、つまり29.4%であるに対し、奇形群では3件、10.3%と明らかに低率であった。奇形と妊娠継続という観点からは予想外の結果である。

e) 初産・経産別

奇形群では経産例が多く、その内分けでは、無脳児と二分脊椎では経産が多く、水頭症は初産に多かった。母親の年齢因子の検討では本調査内では無意義であったので、興味深い。

f) 児の血液型

奇形群の児の血液型分布ではAB型が25%を占めた。対照群では8.7%であり、臍帯血の抗体価が低いことを考慮すると、かなり高率に思われた。但し、父母の血液型の組み合わせから計算したAB型の予想出現率は16.2%である。

ウ 過去の報告例と異なる情報

a) 母の年齢

母が40才以上になると、無脳児の発生頻度は高まると云われるが、本調査では、すべて34才以下であった。

b) 過去の奇形児

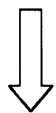
過去に無脳児を出生すると、次からの同胞での発生頻度は30倍以上になると云われるが、本調査の奇形群では1例も特別な既往が認められなかった。

c) 児の性差

従来の報告では、水頭症は男児に多く、無脳児では逆に女児は男児より2~4倍多いと云われているが、本調査では、水頭症は、男児7に女児3件であり一致したが、無脳児の場合、男児5件に対し女児2件であり、男児の発生率は、女児の2.4倍であった。

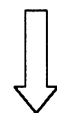
エ 今回妊娠中のレントゲン撮影

例えば、胸部の撮影は対照群73.0%に対し、奇形群は55.2%であった。また、妊娠中に1回でも被曝しているものは、対照群86.4%とかなり多いのに対し、奇形群は65.5%と低率であった。このように、脳神経系の奇形に関する限り、その発生要因としてはレ線被曝は考えにくい。たゞ、最近では、妊婦の胸部のレントゲン撮影が激減しているので、別の視点から、今後考えて行かなければならない。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



先天異常の発生頻度は、種々の理由から、その調査した場所、年代及び方法等によって、かなりのばらつきのあるものが多く、まして、その発生要因については、限られた局面ではわかっているものはあるが、広い範囲の調査による報告はあまりみられない。

今回は、当調査のうち、A 表から D 表まで、つまり妊娠前から分娩時までの、薬剤使用状況を除くすべてのデータについて、脳、神経系の奇形発生要因を求めべく、分析してみた。